



# ラ・マンチャの男

## 1332回公演で幕

市川染五郎→松本幸四郎→松本白鸚はくおう

三つの名前で半世紀演じる

加藤良一

令和4年(2022)1月27日

16世紀のスペイン、劇作家ミゲル・デ・セルバンテスはカトリック教会を冒涇したという疑いで逮捕され、投獄された。牢獄生活の中で構想を得て、のちに小説として売り出した。

それが、“*El Ingenioso Hidalgo Don Quixote De La Mancha*”（才知溢るる郷士ラ・マンチャのドン・キホーテ）である。日本では、『ドン・キホーテ』として出版されている。主人公アロンソ・キハノは、騎士道物語にのめり込みすぎて現実とお話の区別がつかなくなった人物である。自らを遍歴の騎士と任じ、「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」と名乗り、サンチョ・パンサを家来に引き連れ、冒険の旅に出かけるという物語である。

ミュージカルとしては、タイトル曲「ラ・マンチャの男～われこそはドン・キホーテ」(Man of La Mancha - I, Don Quixote)や、ドン・キホーテが宿屋の下働きでかつ売春婦のアルドンサを高貴な姫君と信じて歌う「ダルシネア」(Dulcinea)などがよく知られているが、なかでも「見果てぬ夢」(The Impossible Dream)は、ドン・キホーテがミュージカル中盤で歌い、またラストシーンでも大合唱とともに高らかに歌って喝采を浴びる曲である。

男声合唱団コール・グランツでは、以前これらの曲をステージに乗せたことがあった。歌っていて気持ちの良い曲ばかりだが、英語の発音には常ならず苦勞した記憶がある。

\*\*\*\*\*

### 幸四郎時代のラ・マンチャを観劇

このミュージカルを観たのは1997年、東京の青山劇場で行われた公演だった。何回目の公演かは定かではないが、ロングランを誇っていることだけは知っていた。そのときは、円形舞台を中心にして、右手奥の

客席から見えない場所にブラス中心のバンドが配置されていた。オケがこれだけ引っ込んでいると音はさすがに前には出てこないのが気になった。

ミュージカルはクラシックとちがい、ふつうマイクを使うがそのときもそうであった。オペラと較べる意味などないかもしれないが、**松本幸四郎**はじめどの役者も思いのほか歌が巧いのに感心した。ダルシネア姫（アルドンサ）を演じたのは元宝塚の<sup>おおとりらん</sup>鳳蘭で、死の床についたドン・キホーテ幸四郎との絡みはなかなか見応えがあった。このときは、**松たか子**がアントニア（ドン・キホーテの姪）を演じていたが、ちょっと寂しい歌唱力だったと記憶している。いまではきっとよくなっていることではあろうが…。

圧巻はアンコールだった。とにかく幸四郎が英語で歌ったアンコール「**見果てぬ夢**」は、役者とは思えぬ歌唱力と歌い込んだ年季とが結実したものであった。初演のころは髪もひげも白く染めなければならなかったそうだが、いまでは素顔のまま演じられるようになったという。

## 半世紀に及ぶロングラン公演

1969年に始まった「**ラ・マンチャの男**」は、六代目市川染五郎の時代に計346回上演した。1982年に九代目松本幸四郎になってから919回、2019年二代目松本<sup>はくおう</sup>白鸚になってから67回、2月に予定しているラスト公演までに合計1332回を記録する。単純平均すると月に2回以上公演していることになる。

日本の伝統芸能である歌舞伎と西洋音楽にもとづくミュージカル、両者はかなり異質の世界だが、白鸚はこれをみごとに融合させている。白鸚は、屋号高麗屋として歌舞伎役者であり、舞踊家、俳優、さらに舞台演出家として九代<sup>くだい きんしよ</sup>琴松を名乗る多才ぶりを発揮している。

## 暇な読者でないと読み切れない小説「ドン・キホーテ」

じつは、原作にあたるセルバンテスの「ドン・キホーテ」を一度は手にしたが、未だに読破していない。

原題は前述のとおり、“*El Ingenioso Hidalgo Don Quixote De La Mancha*”（才知溢るる郷士ラ・マンチャのドン・キホーテ）であるが、その書き出しがなんともふるっている。

いわく、「**暇な読者よ**、予がこの書物を己が知能の子として創造しうるかぎり、およそ美しい、高雅な巧緻なものであれかしと願っていることは、いまさらとりたてて誓わないでも、お信じくださるところであろう。」

筆者が未だ読破していない理由はしごく簡単、とにかく長すぎるのだ。面白い場面のところはよいが、それ以外はどうにも冗長で頁が進まず参った。ちなみにこの小説は、日本語に翻訳されたものでも、400字詰め原稿用紙にして3,200枚分、二段組にしてびっしり詰めても700頁を越す大作である。3,200枚分もあるということは、実際に数えて確認したのだが、こんなことをする読者はやはり暇な奴と思われてもしかたなかろう。最後まで読まれずに文字数だけ調べられる本も、世の中広しいえどもそう多くはあるまい。

完

Back

「なんやか」TOPへ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る